

胎動に対する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係：
胎動日記における胎児への意味づけ岡本 依子
(湘北短期大学幼児教育科)菅野 幸恵
(白百合女子大学文学部)根ヶ山 光一
(早稲田大学人間科学部)

妊娠期に妊婦が感じる胎動は、まだ見たり抱いたりできない我が子を直接感じることでできる唯一のものである。本研究では、胎動についての妊婦の語りを胎児への意味づけととらえ、妊婦からみた主観的な母子関係の変化を検討することを目的とした。初産妊婦 33 名より胎動についての 882 の日記を得た。この日記における胎児のからだの部位や内的状態などの語りを胎児への意味づけととらえ検討した。その結果、本データから妊娠期の 2 つのターニング・ポイントが見いだされた。第一のターニング・ポイントは、妊娠 29 ～ 30 週であった。この時期、胎児の“足”についての語りが急増し、それまで胎児を“人間以外”の“モグラ”などとしていた記述が激減する。妊婦は、お腹の存在を“人間の赤ちゃん”として意味づけを構成するようになることが示唆される。第二のターニング・ポイントは、妊娠 33 ～ 34 週で、胎児の“足”についての語りが一時減少する時期である。ここでは、胎児の“応答”との語りが、母親へと意味づけられていたものが第三者への応答との意味づけへ変化した。最後に、胎動が妊婦の意図とは関わりなく生じることそのものに立ち返り、胎児とのやりとりという視点で考察を試みた。

【キー・ワード】胎動、妊娠期の母子関係、胎動日記、意味づけ

目 的

妊娠期に妊婦が感じる胎動は、まだ見たり抱いたりできない我が子を直接感じることでできる唯一のものである。本研究では、胎動についての妊婦の語りを胎児への意味づけととらえ、妊婦からみた主観的な母子関係の変化を検討することを目的とする。

胎児の認知発達がさまざまな研究において明らかにされ(たとえば, Joseph, 2000; Kisilevsky, Fearon, & Muir, 1998 など), 妊娠期においても母子が影響を与え合うことは当然のことと考えられるようになってきた。妊娠期の母子の相互作用を示唆する知見もある(室岡・越野・高橋・力武, 1983)。室岡ほか(1983)は、胎児の聴性反応に着目し、妊娠期からの母親の語りかけの重要性を示唆している。さらに, Hess (1972) のマガモのインプリンティングに関する研究で、孵化前の卵の中の雛鳥の鳴き声に対する親鳥の鳴き方のパターンを変化させることによって、孵化の時期を調整していることが示されている。もちろんこれはマガモについての研究であり、人間の胎児に即当てはまるものではない。ただ、妊娠期の母子相互作用について完全否定することはできないだろう。胎児と妊婦との影響の与え合いが妊娠期にすでに始まるなら、それが母子の関係として母親自身に意識されるのはいつごろからだろうか。

妊娠期の心理的過程についての研究は、母親の感情的適応を扱ったものが多い(Condon & Corkindale, 1997;

花沢, 1979; 大日向, 1981, 1988; 利島, 1983 など)。ここでは、妊娠期の不安や否定的感情が妊婦の身体的変化や生活環境との関連で検討され、出産やその後の育児への影響が強調される。たとえば, Condon & Corkindale (1997) は、妊娠期の抑うつと社会的サポートの欠如について、大日向(1981)は、妊娠の受容と夫婦関係についての影響を、それぞれ検討している。これらの研究では、その緊急性から母親になるプロセスのうえで生じる可能性のある否定的側面(抑うつなど)に言及することが少なくない。そのため、胎児とのやりとりによる母親への移行について詳細に検討した研究は少ないといえるだろう。

では、母親はどんなとき胎児のやりとりを感じられるのだろうか。それは、胎動を感じるときではないだろうか。妊婦は胎動を感じた直後、自分のお腹に話しかけたり、お腹をさすったりすることが多い。あるいは、胎動を期待してお腹に話しかけることもあるだろう。

妊婦の心理的適応に対する胎動の重要性を示唆する研究は少なからず存在する(Condon, 1985; 上妻・岡井・水野, 1983; 川井・大橋・野尻・恒次・庄司, 1990; 川井・庄司・恒次・二木, 1983 など)。たとえば, Condon (1985) では、胎動を初めて経験した後、妊婦の胎児への愛着が急激に増大することを示した。また、妊娠期から幼児期までの母親の子どもへの感情を調べるために SCT 法を用いた研究(川井ほか, 1990; 川井ほか, 1983)では、妊娠期を検討した結果、胎動が妊娠期の母性的行動をもっと

も触発していると考察している。現実の胎動が妊婦への心理的な働きかけとなり、胎児への情緒的なつながりや胎児との相互作用を生じさせている（川井ほか, 1983）と考えることができる。このように、胎動は妊娠中の女性にとって大きな意味を持つにもかかわらず、妊婦の胎動への関わりを妊婦—胎児関係ととらえる研究はほとんどみられない。

ところで、妊婦が胎動を感じるのは、妊娠 16～20 週頃である（間崎・平川, 1998）。胎動を感じる時期については個人差が大きく、また、初産婦よりも経産婦の方がより早期に胎動を感じるといわれている（鈴木・久慈, 1995）。また、蘭（1989）は、はじめての胎動について、小さな生き物、腹部の小さなけいれん、あるいは、腸に空気が入ったような動きなどのように感じられ、“赤ちゃん”が動いていると感じられることはないと述べている。

本研究では、女性が妊娠を知ることと、自身を妊婦あるいは母親と信じられることとは別であるという前提に立つ。また、胎動さえ感じれば、お腹のなかに赤ちゃんがいると単純に確信できるとも仮定しない。胎児の成長にともなって胎動も変化する。それに応じて、妊婦の我が子に対するとらえ方も変化するのではないだろうか。さらに、想像する我が子に変化することで、自身のとらえ方も変化するだろう。その変化は母親になるプロセスを支えるのではないだろうか。妊娠期の母親になるプロセスについて、質問紙や面接などによって直接妊婦に問うこともできるかもしれない。しかし、母親になるプロセスのうえで生じるであろう再構成のダイナミズムに近づくためには、より具体的な妊婦と胎児のやりとりを観察する必要があるだろう。もちろん胎児を観察することには限界がある。そこで、本研究では、妊婦にとって、もっとも直接的な我が子の感覚である胎動に着目する。胎児が自発的に動き、妊婦がその胎動を感じ、それについて語ることを胎児とのやりとりととらえ、その変化をみることによって、母親になるプロセスを描くことを試みる。本研究では、妊婦に胎動についての日記を依頼し、それを妊婦の胎動についての語りのデータとした。

ところで、妊婦は、日記において、胎動を胎児のからだの部位に関連づけて語ることがある。妊婦の推測する胎児のからだの部位は、あまり当てはまらないとも言われている。しかし、ここでは、妊婦がある胎動を感じたとき、その胎動からお腹のなかにいる胎児のからだを具体的にイメージできたかどうかを問題にしたい。澤田・鹿島・南（1992）も、母親が日常の育児実践において抱く子ども観、発達観は、科学的であるかどうかに関わらず、それ自体として意味があると述べている。たとえば、菅野（2001）は、母親の子どもに対する不快感情の母親なりの説明づけを子育ての振り返りの契機と位置づけ、Conrad（1998）は、Darwin の我が子を観察した日記を

分析し、我が子についての記述の変化を Darwin 自身と子どもとの関係の変化の現れととらえた。これらの研究は、母親の素朴な育児観や、父親の主観的な我が子との関係の認識を扱ったものといえるだろう。

つまり、妊婦が胎動日記に“足”や“手”と記すものは、まだ直接見たことのない我が子への意味づけである。妊婦が胎動に対して胎児のからだや内的状態を意味づけること、あるいは、意味づけようとするそのものに、意味があるのではないだろうか。女性は出産、あるいは妊娠すると自動的に母親になるわけではない（大日向, 1988）。子育てを通して、自らを母親と思えるようになる。自らのからだに感じる胎動を、胎児と意味づけることによって、胎児との主観的な母子関係が、具体的なかたちで始まる。この過程を記述することにより、妊婦が母親となるプロセスの一端を明らかにすることができるだろう。

本研究では、母親の胎動への意味づけを分析することによって、母親が胎動によって我が子のイメージを構成・再構成する過程を記述することを目的とする。妊婦自身が、胎動と胎児をどのように結びつけるか、つまり、自らの身体に感じる感覚から、これから生まれる我が子をどのようにとらえようとしているのかを扱いたい。妊婦が、自身のからだに感じられる胎動を、具体的に“足”や“手”と記述するには、無自覚であるかもしれないが、妊婦の積極的な意味づけを必要とする。本研究では、そのような意味づけの過程を、妊婦にとっての親への移行（たとえば、Deutch, Ruble, Fleming, Brooks-Gunn, & Stangor, 1988; Fledman & Aschenbrenner, 1983; Levy-Shiff, 1994 など）の過程ととらえられないかと考えた。

ところで、本研究は、このような問いを検討する第一段階である。そのためデータは、十分統制されているとはいえない。しかし、それぞれの日記は協力者によって丁寧に書かれ、日常的な妊婦の語りが生き活きと現れていた。このデータは本研究の問いに対して多くの情報を含んでいるものと考えられた。一方、妊娠期における胎児への意味づけの過程については、妊娠のどの時期にどのように変化するかについての基礎的な資料すら、これまでほとんど提出されていない。このことを考えると、まずはデータを概観し、語りを読み解く視点を探り出す必要がある。そこで、本研究では、まず全データを週齢ごとに集計し、胎児への意味づけ過程の大筋を描き、分析の視点を得る。そのうえで、ケーススタディに耐えられる妊婦の胎動日記について、具体的な語りに触れながら記述的に分析を試みる。

方 法

胎動日記協力者 東京近郊に在住する初産妊婦 33 名。妊婦の年齢は、出産時点で平均 30.06 歳（25～39 歳）で

あった。このうち、出産時まで骨盤位（逆子）だったのは6名、また、生まれた子どもは、男児18名、女児15名であった。母親の最終学歴は、専門学校卒4名、高校卒6名、短大卒10名、大学・大学院卒13名であった。妊娠期中毒症などのトラブルがあったのは3名で、平均出産週齢は、39.03週（37～42週）であった。

これらの参加者は、妊娠期から2歳までの縦断研究に参加の意思を表明し、胎動日記の依頼にも応じたものである。なお、縦断研究への参加依頼は、市区で開催された、初産婦を対象にする妊娠・出産の支援を目的とした母親学級において行った。

手続き 上記の妊婦に胎動日記の記載を依頼した。どの胎動について記録するかは、協力者に任せることとした。これは、1日に胎動を感じる回数が多くそのうち1回を指定することが困難であることと、妊婦の胎動への主観的な思いを積極的にとらえるためには胎動の選定も協力者に任せることがよいだろうと判断したことによる。ただし、協力者には1日1回程度を目安に記録するよう教示した。

胎動日記の構成 胎動日記は胎動1回分について、自由記述形式で“胎動について”、“胎動が生じた状況”、および“その胎動に対して”の3つの領域に記録するものである。また、胎動日記には、記録日および時間、妊娠週齢を記入する欄をもうけた。

分析単位 33名の参加者から回収された胎動日記882を分析の対象とした。胎動日記は3つの領域から構成されるが、分析においてはこの3領域をとくに区別せず胎動1回分の記録を分析単位とした。これは、回収された日記のなかには、妊婦がこの3つの領域を区別していないと思われるものがあったためでもある。

期間 1997年5月～11月。

日記の概要 得られた日記は882で、1名あたり平均26.73 (range; 1～145) で、それぞれの参加者が日記を記録した期間は、最初の日記が平均31.18週 (range; 16～37週)、最後の日記が平均37.67週 (range; 30～40週) であった。2週齢ごとの日記数や、日記を書いた妊婦数などはTable 1の通りである。Table 1で、協力者数とは、その週齢期間内に一度でも日記を書いた妊婦の人数であり、協力可能者数とは、日記を書き始めてから出産までの期間にいる妊婦の人数である。また、協力割合とは、日記を書くことが可能だった妊婦に対する日記を書いた妊婦の割合を算出したものである。協力割合をみると、39～40週以外はどの時期もかなり高い。また、39～40週において日記を書く妊婦の割合が低かったのは、出産が近づくと胎動そのものが減少する、出産が近づくとつれ、出産そのものや産後のことに関心が移り、胎動に関心が薄れる、さらに、出産に向けた里帰りや、出産の準備のため、日記を書く時間がなくなる、などの理由が考えら

Table 1 日記数および協力者数

週齢	日記数	男児	女児	協力者数	可能者数	協力割合
< 24	11	0	11	3	3	1
25 - 26	31	1	30	5	6	0.83
27 - 28	70	11	59	6	7	0.86
29 - 30	88	34	54	12	13	0.92
31 - 32	108	53	55	16	17	0.94
33 - 34	137	78	59	22	24	0.92
35 - 36	212	124	88	29	31	0.94
37 - 38	171	88	83	29	33	0.88
39 - 40	54	18	36	11	24	0.46
合計	882	407	475	33		

れる。

分析 得られた882の胎動日記をもとに、胎児への意味づけの変化を検討するため、まず、胎児についての語られた表現を拾い上げ整理した。胎児についての語りには、胎児の“からだ”、胎児の“内的状態”、さらに、胎児の“発話”や“性格”、胎児の行為として、妊婦や他の人やものへの“応答”という語りがあった¹⁾。また、妊婦の主観的母子関係を見る視点として、Conrad (1998) の日記の分析において、我が子の表現をitからheへと変化させたということに示唆を得て、日記に登場する人物の“呼称”にも着目した。それぞれのカテゴリとその定義をTable 2に示す。上位カテゴリは、“児の表現”および“呼称の用い方”である。前者は、胎動日記において語られた胎児のからだや内的状態などの記述に関するカテゴリで、後者は、日記上で語られる人物がどのような呼称を用いられているかに関するカテゴリである。とくに、“児の表現”の下位カテゴリである“からだの部位”は、語られる表現の差異を重視し、類似した部位を表現する記述であっても、同一でない限り別のカテゴリとして扱った。これは、妊婦が胎児をイメージする際、胎児のからだの部位がどの程度精緻化しているかが指標となるだろうことを考慮したためで、たとえば、“足”と“足の裏”、“手”と“手の甲”などを区別するためである。それをカテゴリとして、当該週齢の総日記数に対する語られた日記数の割合を、2週齢ごとに集計した。また、妊婦によって日記数に差があることを考慮し、当該週齢に日記を一度でも書いた妊婦数に対する、当該カテゴリについて一度でも語った妊婦数の割合も集計した (Appendix)。

分析1では、882のすべての胎動日記について、Table 2のカテゴリの語られた割合の推移を検討する。そのうえで、胎児への意味づけ過程の大筋を描き、胎動日記の具体的な語りを分析するための視点を探り出す。

1) これ以外に、「蹴る」や「踊る」などの胎児の行為についての表現もあった。本稿では、胎児のからだの記述に対応することが予想されるので、分析からはずした。

Table 2 胎動日記のカテゴリ表

	カテゴリ		内容	例
児の表現	(1)からだの部位； 胎児のからだの部位 に記述のあったすべて をカテゴリとして 採用。	手	「手」のみをコーディング「手のひら」 「腕」などは含めない	“手”
		足	「足」のみをコーディング	“足”
		指	「指」のみをコーディング	“指”
		ひじ	「ひじ」のみをコーディング	“ひじ”
		げんこつ	「げんこつ」のみをコーディング	“げんこつ”
		腕	「腕」のみをコーディング	“腕”
		肩	「肩」のみをコーディング	“肩”
		手の甲	「手の甲」のみをコーディング	“手の甲”
		足の裏	「足の裏」のみをコーディング	“足の裏”
		ひざ	「ひざ」のみをコーディング	“ひざ”
		足先	「足先」のみをコーディング	“足先”
		かかと	「かかと」のみをコーディング	“かかと”
		頭	「頭」のみをコーディング	“頭”
		おしり	「おしり」のみをコーディング	“おしり”
		へその緒	「へその緒」のみをコーディング	“へその緒”
		背中	「背中」のみをコーディング	“背中”
		顔	「顔」のみをコーディング	“顔”
		首	「首」のみをコーディング	“首”
		全身	「全身」のみをコーディング	“全身”
		胴体	「胴体」のみをコーディング	“胴体”
		心臓	「心臓」のみをコーディング	“心臓”
	人間以外	人間のからだの部位ではないが、胎児のことを表すもの	“虫” “モグラ” “水鉄砲” など	
	(2) 内的状態	正の内的状態	胎児の正の感情・思考など	“喜んでいる” “気分がよさそう” など
		負の内的状態	胎児の負の感情・思考など	“心配している” “気分が悪い” など
		その他の内的状態	胎児の正・負以外の感情・思考など	“要求” “動きたい” “自己主張” など
	(3) 発話		直接語法(「 」)や代弁での表現	“「そんなことじゃダメだぞー」と赤ちゃんに叱られた” など
	(4) 性格		胎児の性格や性別、嗜好についての表現	“やはり電車好きなんだろうか” “元気だなあ” “あばれんぼう” など
(5) 応答	妊婦への応答	ターゲットの胎動が妊婦の先行行為への応答として捉えられている	“私（妊婦）が心配に思っていると元気だよ……” “声をかけたら返事をしたみたいに……” など	
	妊婦以外への応答	ターゲットの胎動が妊婦以外の先行事項への応答として捉えられている	“音楽をかけていたらそれに合わせて……” “主人（父）がおなかをさすったら……” など	
呼称の 用い方	(6) 妊婦自身の表現	妊婦視点の妊婦	自分自身のことを「私」など自分からの呼び方で表現	“私が横になっているとき” など
		児視点の妊婦	自分自身のことを「ママ」「お母さん」など児からの呼び方で表現	“ママね、……” “お母さんに教えてね” など
	(7) 第三者の表現	妊婦視点の第三者	妊婦の夫や(義)母を「主人」「母」など自分からの呼び方で表現	“主人は……” “私の母が……” など
		児視点の第三者	妊婦の夫や(義)母を「パパ」「おばあちゃん」など児からの呼び方で表現	“パパが帰ってきたよ” “おばあちゃんも喜んでるよ” など

Table 3 日記において表現されたからだの部分

カテゴリ	頻度	初出(週)	カテゴリ	頻度	初出(週)
足	120	25	ひじ	2	39
手	53	28	手の甲	1	37
頭	32	27	指	1	36
全身	23	27	腕	1	31
おしり	20	29	足先	1	31
心臓	18	26	かかと	1	34
足の裏	6	28	顔	1	30
ひざ	6	26	首	1	33
へその緒	5	27	肩	1	36
げんこつ	4	26	胴体	1	36
背中	3	30	人間以外 ^{*1)}	41	> 24

*1) 「人間以外」は、本データのもっとも週齢の浅い日記から見られた。

分析2では、分析1で描かれた、胎児への意味づけ過程の大筋を吟味し、さらに変化の詳細を検討するため、日記協力者のうち妊婦52の胎動日記を中心に、必要に応じてほかの妊婦の日記を引用しながら分析を行う。妊婦52は、日記協力期間が長く(26～39週)、日記数をもっとも多く(145)、かつ、1回の日記への記述が非常に厚く、記述的な分析に十分耐えられるものであった。

結果と考察

分析1

胎児への意味づけの週齢変化を概観するため、得られた882の胎動日記を、Table 2のカテゴリについてコーディングし、2週齢ごとに語られた日記数の割合を算出した。コーディングは、胎動日記に書かれた表現において、それぞれのカテゴリに当てはまるものがあるかどうかを判断するというものである。著者らを含む4人のコーダーが行った。コーディングの一致率は、任意の10名(日記数242)について求めた。平均すると.975で、もっとも一致率が高いものは“からだの部位”で.996、もっとも低いものは“内的状態”で.884であった。

胎児のからだのイメージ まず、胎動日記において語られた胎児の“からだの部位”について検討する。胎児の“からだの部位”として語られたものは、全部で22種類あった。ここには、人間のからだを表現することばではないが胎児そのものを表す“虫”、“モグラ”などをまとめたカテゴリの“人間以外”を含む。この22種類の“からだの部位”を、それが胎動日記において語られた総頻度と初出の週齢をあわせてTable 3に示す。ここで興味深いのは、妊婦が“足”や“手”と語るだけでなく、それらの部位をさらに限定した“足の裏”や“手の甲”とも語ることである。“足”の限定的な部位として語られたのは、“足の裏”、“ひざ”、“足先”、および“かかと”であった。“手”については、“げんこつ”、“ひじ”、“手の甲”、“指”、および“腕”であった。これらの限定的なからだの部位は、2事例を除いてすべて、“足”や“手”が

Table 4 “からだの部位”および“内的状態”を語らなかった妊婦

ID	総日記数	日記協力期間(週)	
11	2	32	“からだ” “内的状態” なし
13	6	33-35	“からだ” なし
31	10	35-38	“内的状態” なし
32	1	37	“からだ” なし
37	29	34-38	“からだ” なし
39	9	31-37	“内的状態” なし
62	7	37-39	“内的状態” なし
71	4	36-37	“からだ” なし

その妊婦にとって先に語られていた。2事例とは、妊婦52の26週齢における“げんこつ”、および、妊婦43の32週の“ひざ”である(妊婦43は、日記を書き始めたのが30週なので、それ以前に“足”のイメージが構成されていた可能性はある)。このことから、これらの限定的なからだの部位についての語りは、胎児のからだのイメージの精緻化といえるだろう。頻度としては少数であるが、胎動の微妙な違いをも感じ取ろうとする妊婦の胎児への積極性が窺える。

また、“からだ”の部位を一度も語らなかった妊婦は、33名中5名であった(Table 4)。Table 4をみると、からだの部位を語らなかった妊婦の多くが、日記数が少なく、また妊娠週齢も後半であった。

頻度の多かった“足”、“手”、“人間以外”について、2週齢ごとの総日記数に対する割合をFigure 1に示す。さらに、今回のデータは、妊婦1名あたりの日記数にかなり大きな差があるので、該当カテゴリを一度でも語った妊婦の割合をAppendixに示す。

Figure 1が示すように、週齢の浅い28週以前は“人間以外”がもっとも多く語られている²⁾。妊娠週齢の浅いこ

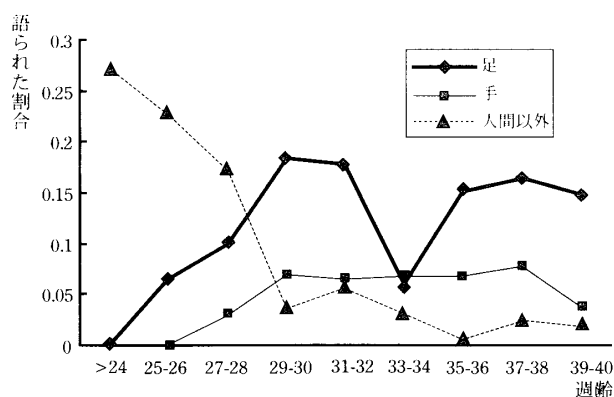


Figure 1 からだ (足・手・人間以外)

2) Appendix では、28週以前も入れ替わりがあるが、この時期は、協力数も、1人あたりの日記数も少ないので、不安定な結果がでやすいといえる。ここでは、これを念頭に置きつつ、日記の割合について論を進める。

の時期には、すでに日記を書き始めていた妊婦が少ない。28週までに日記を書き始めた協力可能者7名中、“人間以外”の語りがみられたのは3名、全週齢においては、33名中8名であった。以下に、妊婦42の“人間以外”の語りの例を引用する。なお、語りの例示は、括弧内に、日記のID番号および妊娠週齢を示し、斜字部分は日記における語りの抜粋、文末にカテゴリを示す。ID番号は、はじめの2桁が妊婦を示す番号であり、妊娠週齢は、wで示す。また、ここで示すカテゴリは、本文に関わるカテゴリのみ記載する。カテゴリに関わりなく事例を示すときは、カテゴリを記載しない。

(42003;27w) グルグル。魚が泳いでいる感じ。：人間以外

この“人間以外”は本データのかかなり最初の時期から現れるので、胎動の感じ始めに特徴的な語りであると考えられる³⁾。“人間以外”は週齢が増すごとに語られる割合が激減する。

“足”は、胎動日記においてもっとも多く語られたカテゴリであった。全部で882の日記のうち120で語られていた。初出週齢は25週と早い時期で、29～30週以降は33～34週で一度落ち込む。28週以前と33～34週以外の時期では、からだの部位のなかで“足”がもっとも高い割合で見られた。胎動といえば足で蹴るものというイメージが社会的に流布していることも影響していると思われる。

(500040;40w) 上の方まで動くのは、これ、足かな？手で足の形を感じようと思ってつかもうとしてみるけど、フッと下に沈んじゃって……：足

29～30週において、語られる割合が増大した“足”と、逆に減少した“人間以外”が入れ替わる。また、33～34週において、“足”の語られる割合が一時的に減少する。

“足”に次いで多かった“手”については、総頻度が、882の日記中54で、初出週齢は28週と“足”よりやや遅れる。

(48002;33w) グーッと手で押し上げる感じで。けることは多いけど、手を伸ばすのは少ないからビックリ！：手

(33012;37w) 赤ちゃんの手の甲が盛り上がって……。触って見たら手の形のようなものを触れているように感じた。とってもかわいい赤ちゃんの手でした。：手の甲
からだの部位について他に特徴的であったのは、“心臓”である。“心臓”という語りは、胎児の呼吸様運動に意味づけられたものと思われる。呼吸様運動とは、妊娠16週ごろ（胎動として感じられるのはもう少し遅れる）から

始まる胎児の横隔膜の運動で（荒井、1976）、一定の間隔でしばらく続くピクピクピクピクという動きである。これは他の胎動とはかなり異なって感じられるものであり、いつもの胎動とは違うという点から胎児や母親のネガティブな感情と関連づけて語られることが多かった。

(53006;32w) シャッキリをしているような、心臓の音のような定期的に繰り返される動きがあった。これって赤ちゃんがちょっと苦しいのかな。：心臓

ここまで、胎動日記で語られた胎児のからだの部位についてみてきた。ここでは、2つの時点に特徴があった。ひとつは、29～30週で、減少してきた“人間以外”と増加してきた“足”が入れ替わる時点である。もうひとつは、33～34週で、“足”が一時減少する時点である。

胎児の内的状態・発話・性格 胎動日記では、胎児の感情や思考、発話、胎児の性格や嗜好についても語られた。週齢ごとの語られた割合の変化をFigure 2に示す。なお、胎児の“内的状態”を語らなかった妊婦は、33名中4名であった（Table 4）。胎児の“からだ”と同様、“内的状態”についても、妊婦にイメージされやすいものといえるだろう。それぞれの例を以下に示す。

(57014;32w) 1歳の男の子を抱っこ……やきもちをやいているように思えた。：負の内的状態

(33006;36w) 「お母さん、がんばって！そんなコトじゃダメだぞー！」と赤ちゃんにしかられた：発話

(36016;35w) いつからこんなあばれんぼうになったのだろう。おとなしい子だったのに。：性格

“胎児の発話”および“胎児の性格”は、“胎児の内的状態”に比べて、語られた割合も少なく、週齢ごとの割合の変化も小さかった。ただし、“胎児の発話”については、29～30週で語る妊婦の割合が一時高くなっている（Appendix）。つまり、この週齢で、胎児が発話しているような語りが、広くさまざまな妊婦にみられるが、ひとりの妊婦が何度も胎児の発話を語ることはないのである。

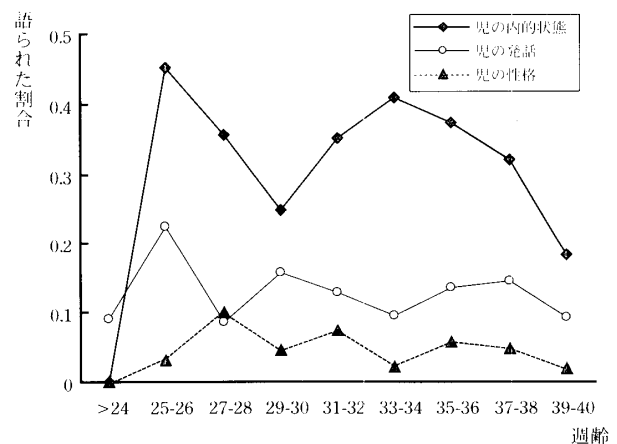


Figure 2 胎児の内的状態・発話・性格

3) ただし、本データは、協力者を母親学級で募集したが、母親学級には週齢がある程度増してから参加する母親が多く、そのため感じ始めのころのデータが非常に少ない。今後、さらに週齢の浅い時期についてもデータを収集していく必要があるだろう。

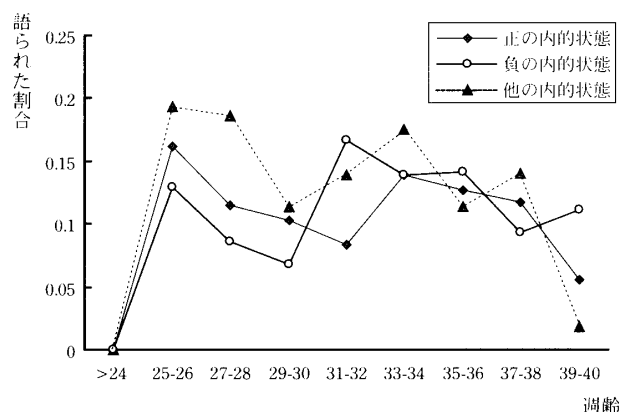


Figure 3 胎児の内的状態の内容

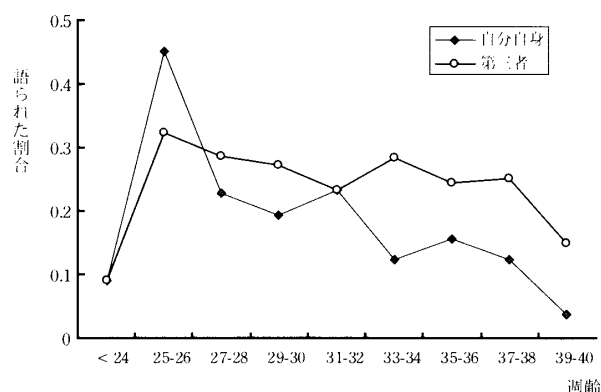


Figure 5 日記に現れた人物

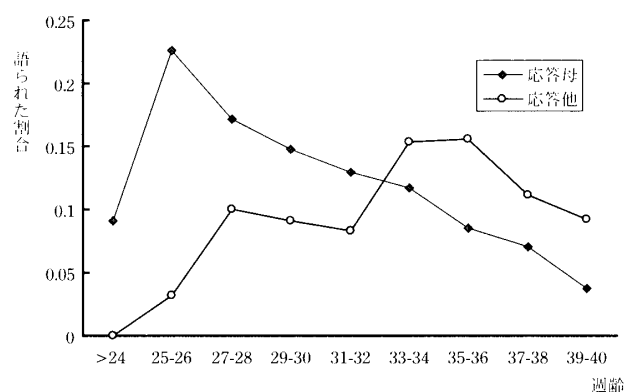


Figure 4 胎児の応答

全体を通して語られる割合が高かったのが“胎児の内的状態”であった。このカテゴリも、29～30週を境に2つのピークを持つ。この同じ週齢で、胎児に対する内的状態の意味づけが一時落ち込むということは、その前後で質的に異なっている可能性がある。そこで、内的状態を正、負、および、その他の内的状態に分け、示したものがFigure 3である。

これをみると、29～30週以前は、負の内的状態が正の内的状態を越えることはなく、並行して増減する。しかし、29～30週以降、正、負、および、その他の内的状態が週齢ごとに入れ替わり、胎児の内的状態の正負に差はなくなる。これは、語った妊婦の割合でも同様の結果である（Appendix）。

胎児の応答 “母への応答”とは、胎児が母親に対して応答したとして胎動が語られたものであり、“他への応答”は、胎児が母親以外の夫や物音に反応したものととして胎動が語られていたものである。これらの週齢ごとの日記に語られた割合の変化をFigure 4に、それぞれの例は以下に示す。

(53003;32w) (2つの名前候補をおなかにむかって) ひとつずつ言ってみた。でも、両方にお返事があった。：母への応答

(43005;31w) 体中でリキンで嫌がっている感じ。主人がアマチュアバンドをやっていた時のテープ……を聞いていた。：他への応答

“母への応答”は、25～26週以降減り続け、それとは逆に、“他への応答”は33～34、35～36週でピークを迎えるように増減する。妊娠期の胎児が外からの刺激に対して反応することはよく知られている。胎児の聴性反応は24週頃からとされており、外部の音に対する心拍数の変化や胎動の発生が少なくとも妊娠最後の2ヶ月には観察される（多田，1992）。また、触覚の発達にはさらに早く、妊娠7週半ごろから反応が生じる（多田，1992）。つまり、胎児は母親や夫の声や外部の音、あるいは、お腹を軽く押すといった刺激に対して胎動として反応することが可能である。

しかし、この胎動日記の結果を、単純に胎児の聴覚や触覚の発達と考えるなら矛盾が生じる。“母への応答”は25～26週以降、“他への応答”は35～36週以降、語られる割合が減少する。さらに、33～34週以降は“他への応答”が“母への応答”より高い割合を示すようになる。胎児の聴覚や触覚の発達を反映するものであるなら減少するはずはなく、胎児にとって母親より近い存在はいないので、母親より遠くからの刺激への応答が、“母への応答”より多くなるはずもないのである。むしろ、この結果は、妊婦の関心や胎児への意味づけの変化ととらえた方がいだろう。

人称の用い方 胎動日記において、自分自身や第三者がどのくらい日記に現れるかについて週齢ごとの日記数の割合を表したものが、Figure 5である。25～26週齢を除いて、自分自身よりも第三者が語られることが多い。

では、これらの自分自身や第三者をどのような呼び方で語っていたのだろうか。自分自身と第三者について呼称に着目する。妊婦自身が自分のことを“私”など自分からの視点で表現したものを“妊婦視点の妊婦”として、“ママ”や“お母さん”と児からの視点で表現したものを“児視点の妊婦”として、それらの相対的な割合を週齢ご

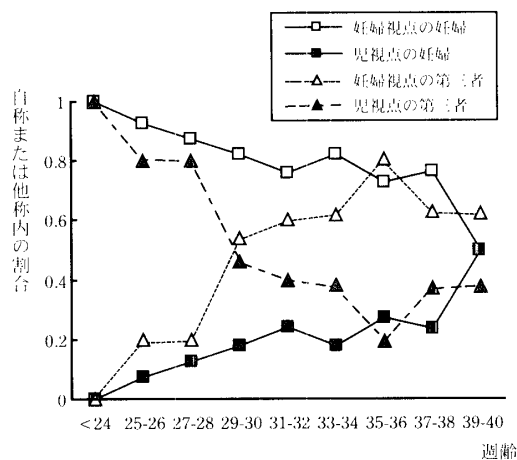


Figure 6 妊婦自身と第三者の呼称

とに比較した。また、妊婦の夫や母親のことを“主人”，“母”など妊婦自身からの視点で表現したものを“妊婦視点の第三者”として，“パパ”，“おばあちゃん”など児からの視点で表現したものを“児視点の第三者”として同様に集計し（Figure 6），それぞれの例を示す。

（57030; 37w）ママのお腹はせまいけど，でもあともう少しだから，おりこうでいてネと声をかける。：児視点の妊婦

（59022; 35w）夫の写真を見ながら……。一緒に見ているよって知らせてくれた気がした。：妊婦視点の第三者

（36003; 30w）今日，パパが八王子から来てくれて，おーちゃん（胎児の呼び名）もよく話に参加していたよう。：児視点の第三者

妊婦自身の呼称については，週齢の浅い頃は妊婦視点で“私”と表現され，週齢が増すごとに，児視点で“ママ”などと語られる割合が増加し，妊婦視点を超えることはないが，両者の割合が接近した。また，第三者については，これと逆で，週齢の浅い頃は，児視点で“パパ”や“おばあちゃん”と表現していたものが，29～30週で“妊婦視点の第三者”が“児視点の第三者”の割合を上回るようになる。

ここで，分析1の結果をまとめ，具体的な語りを読み解く視点を整理する。まず，いくつかのカテゴリの割合の変化に共通して現れた，ターニング・ポイントがあった。ひとつは29～30週齢で，もうひとつは33～34週齢である。まず，29～30週齢では，胎児のからだについての語りのうち，“人間以外”と“足”の語られる割合が入れ替わり，“内的状態”についての語りが一時的に減少した。妊婦は，それまで第三者のことを児視点で語る割合の方が高かったが，この時期，妊婦視点で語る割合の方が高くなった。

この時期の妊婦は，胎児の内的状態より胎児のからだへの関心が高い。この29～30週ころは，子宮底がへそと

みぞおちの間くらいにまであがり（鈴木・久慈，1995），それにとまって胎児がより高い位置にあがってくる時期である。胎動は，それまでお腹全体で感じていた“かたまりの動き（蘭，1989）”だけでなく，お腹の一部に狭く強く圧迫される胎動も感じるようになってくる。このような局所的な胎動に対して，“足”と意味づけているのであろう。胎児のからだに関心が向くことで，内的状態への語りが減少するとしても，なぜ“人間以外”が減少したのだろうか。“人間以外”と“足”の増減は，どのような過程を経ているのだろうか。また，日記に現れる人物の呼称についても，自身については，児視点（“ママ”）が徐々に増加する一方で，第三者については，児視点だったものが妊婦視点へ，いわば逆行することは，どのように解釈できるだろうか。

もうひとつのターニング・ポイントは33～34週であった。胎児の“足”を語る割合が一時的に減少し，“内的状態”を語る割合が増加していた。また，胎児の“応答”については，“母への応答”と“他への応答”の割合が入れ替わり，“他への応答”が増した。

この時期は，もともと胎児位置が高く，妊婦にとっては負担の大きな時期でもある（鈴木・久慈，1995）。胎児位置が高いということは，胎児の微妙な動きも感じやすい。胎動の微妙な違いや妊婦自身の身体への圧迫感と，胎児の“内的状態”を結びつけて意味づけているのだろう。では，この時期に，妊婦自身に向かうものとして語られた胎児の応答が，第三者に向かうものとして語られる割合が増したことを，どのように解釈すればいいだろうか。

分析1では，量的な推移はわかるが，それが妊婦の母親へのプロセスとしてとらえられるかどうかまではわからない。分析2では，これらの問いを分析の視点として，もともと多くの日記を書いた妊婦52の具体的な語りを中心に，他の妊婦の日記も参照しながら検討する。

分析2

分析2では，妊婦52の胎動日記を中心に記述的に検討する。その際の分析の視点として，29～30週の前後における“人間以外”と“足”の増減がどのような過程を経ているのか，あるいは，33～34週の前後で，胎児の“母への応答”と“他への応答”の増減をどのように解釈できるかである。そこから，妊娠期の胎児への意味づけの過程についてモデルを描くことを試みる。さらに，主観的母子関係をとらえるべく，呼称の用い方の変化が，このモデルのうえで解釈可能かどうかを検討する。

第一のターニング・ポイント：29～30週齢 週齢のもっとも浅い時期から29～30週に向けての変化を検討する。妊婦18は，本データでは唯一，はじめて感じた胎動から日記が確保されている妊婦で，日記数は15と少ないが，週の浅い時期についてデータが充実している。

(18001;16w) もしかしてそうかしらと疑う程度の弱い小さな感触。虫とか、腸が一瞬ピクッと動いたような。：人間以外

さらに、週齢が進んでも、

(18003;23w) 小さな生き物がごそごそ……。きもちわるいと思うのはかわいそうだけど、きもちわるい。：人間以外

これらの語りから、お腹のなかの我が子を、まだ“人間の赤ちゃん”としてイメージしていないことが窺える。ところで、(18003)では、胎動を“きもちわるい”と語っているが、これを胎動に対する単なるネガティブな感情にとらえていいだろうか。妊婦18は、初めての胎動(18001)について、胎動かどうか“疑う程度の”と語っていた。それと比較するなら、(18003)の胎動に対する一見、ネガティブな感情表現は、胎動であることそれ自体の確信の表れと解釈できる。自分の身体に感じるかすかな感触を胎動として確信することそのものが、最初のプロセスなのだろう。

(18005;25w) ポコッポコッポコッ。3cm くらいのものがけとばしているような。……「これは足かなー？」と言いながらお腹のなかを探った。：足

(18006;26w) おさまりのいい場所を探してるのかな？……ひざを曲げ伸ばししてるみたいと想像できるくらいの強さ。：ひざ

(18007;31w) ゴーンとけとばす感じ。……「足を触れるのはうれしい、かわいい足だ」と思うんだけど、痛いのはつらい。：足

(18005)は、妊婦18がはじめて“足”を語ったものである。“3cm くらいのも”という語りが局所的な胎動を示している。また、この妊婦は、“足かなー？”とクエスチョン・マーク付きで記述しており、“足”という意味づけの不完全さが現れている。さらに、その翌週(18006)には、“ひざを曲げ伸ばしして～”と、“足”から“ひざ”に精緻化している。その一方で、“～みたいと想像できるくらい～”と間接的な表現を用いている。妊婦は、“ひざ”についても確信には至っていないのではないだろうか。ところが、31週の(18007)では、胎児の“足”を疑う様子がなくなっている。“足”というイメージも急に得られるものでなく、徐々に“足”ではないかと思えるように変化するのだろう。

妊婦52は、26週から日記が得られている。“人間以外”は最初の日記から、“足”もその週のうちに現れる。そして、第一のターニング・ポイントに向けて、“人間以外”と“足”が交互に語られている。

(52002;26w) モグラが土の下を通ると土が盛り上がるように……。：人間以外

(52032;27w) 横向きになった時。お腹が圧迫されて苦しかったのかな？……おふとんと私の間によしべえ(胎

児の呼び名)の足をはさんじゃったのかと思うほどのバタつかせようだった……。手でわき腹をおさえると、足の動きがすごく感じられた。：足

(52045;27w) モグラの動き。モコモコッとお腹が盛り上がる。：人間以外

(52058;28w) 多分、足と思われるものが子宮の内側をコンコンと動く。……“私とは別の生命体だ”というのがよくわかる。もう1人の人間なんだなあー。

(52065;28w) 人間らしくなった！本当に本当の赤ちゃんだ!!と実感しちゃった。

妊婦52も、“人間以外”が先行し、その後“足”が語られている。そして、(52058)や(52065)で、胎動を生じさせている存在に対して“人間の赤ちゃんの実感”を語っている。もちろん、お腹のなかの胎児が“人間の赤ちゃん”であることを知らない妊婦はいない。ところが、日記では“「もう」1人の人間なんだなあー”と、まるで人間へと変化したかのように語っている。胎動について人間以外の“モグラ”や“虫”を語ることが週齢の浅い時期の特徴である。これは、妊婦が感じる胎動が、単に“虫”や“モグラ”に似ていると言うだけではないだろう。むしろ、妊婦は胎動を“人間の赤ちゃん”と(おそらく、そう信じたいのに)実感できない、そのできなさを抱えているのではないだろうか。人間以外の“虫”や“モグラ”という語りは、胎動の動きをなんとかとらえようとする妊婦の積極性と解釈できないだろうか。

(54001;24w) 「赤ちゃん」という感じはあまりない。

(54004;28w) 両手をあててみる。赤ちゃんという実感はない。

と実感のなさを繰り返し語る妊婦もいた。

では、妊婦52のように、“人間の赤ちゃんの実感”を語った妊婦は、どのような過程でこの実感を得たのだろうか。胎動に対して、人間(の赤ちゃん)を実感したという語りが、29～30週以前に日記を書き始めた妊婦13名中4名にみられた。そして、4名とも“人間だと実感”するより前に、すでに“足”を語っている。たとえば、妊婦16は以下の通りである。なお、(16002)は、妊婦16について、はじめて“足”が語られた日記であるが、ここでも、“足(?)”とクエスチョン・マークが付いているとおり、意味づけの不完全さの現れとして、興味深い。

(16002;29w) お腹の中で、足(?)で押されている感じ。：足

(16005;33w) 人間がこのお腹のなかにいるんだ……と改めて思う。

胎児のからだの部位が一部であってもイメージできつつあることによって、28週以前の“虫”や“モグラ”などを含む“人間以外”が減少するのだろう。つまり、29～30週前後の具体的な“足”というイメージは、“足”のついたからだ全体のイメージを導く(もちろん、足以外の

部位は漠然としたものだろうが)。これが、からだを持つ人間の赤ちゃんという意味づけへと変化するきっかけとなっているものと思われる。

では、人間以外のものから人間の赤ちゃんへの意味づけの変化は、一方向的なものだろうか。妊婦 18 のように、23 週以降“人間以外”の語りは出てこない妊婦もいるが、31 週以降も 7 名の妊婦が“人間以外”を語っており、低い割合であるが 40 週まで 1 名以上が“人間以外”を語っている。たとえば、妊婦 52 について、“人間以外”の語りは日記開始の 26 週から 34 週まで、“足”という語りは 27 週から 36 週まで、さらに、“人間の赤ちゃんという実感”に関する語りが 28 週から 32 週まで交互に現れる⁴⁾。おそらく、胎児が誕生するまで、“人間の赤ちゃん”という確信は完全なものとはならないだろう。たとえば、妊婦が胎児について想像しようとしたとき、まずその顔を連想しそうなものであるが、胎動日記において、胎児の顔を具体的に語ったものはなかった(“どんな顔だろう”などの語りはあるが)。妊婦は、お腹のなかの胎児に、“人間以外”のイメージも保持しつつ、“足”など具体的なかからだの部位、さらに“人間の赤ちゃん”という意味づけを重層的に構成していくのではないだろうか。それゆえ、妊娠期間に何度も“人間だ!”という実感が生じるのだろう。

ところで、この 29～30 週は、“内的状態”の語りが一時的に減少する時期でもあった。そして、この時期以前は、負の内的状態が正の内的状態を越えることはなく、並行して増減する。しかし、29～30 週以降、正、負、および、その他の内的状態が週齢ごとに入れ替わり、内的状態の正負の差はなくなる。上で解釈してきたように、

4) 参加者 ID 52 の妊婦について、28 週以前と 29 週以後にわけて、“人間以外”と“足”の語られた頻度を、参考までに比較した。28 週以前(日記数 70)では、“人間以外”：“足”が 18：8 で、29 週以降(日記数 75)では、4：16 であった。

5) 日記開始が 28 週以前で 31 週以降も日記を書き続けた妊婦 6 名中 3 名は、週齢の浅い時期に胎児の内的状態の語りそのものがなかった。これらの妊婦による、胎児の“内的状態”の語りは、それぞれ、31 週と 32 週、35 週に初出する。これは、“人間以外”のものには内的状態を意味づけにくいということであろうか。また、紙面の都合上論じられなかったが、31～32 週において、はじめて負の内的状態が正の内的状態を超える。胎児に“負”の内的状態を意味づけられるように変化することは、興味深い。

6) ここでは、“足”との意味づけが“人間”としての実感を導き、それによって“内的状態”も重層化すると解釈を述べた。一方で、“足”の増加をきっかけとして、25～26 週の“内的状態”の増加を考えられないだろうか。これを否定する材料は、データからは見つかからない。しかし、“内的状態”の意味づけが構成されたなら、そこから導かれやすい“からだの部位”は、“顔”ではないだろうか。少なくとも“足”ではないだろう。推測の域を超えないが、25 週～28 週ごろの“内的状態”は、“人間以外”の生き物への意味づけであり、その後、“人間”への意味づけが重層化するのではないだろうか。

29～30 週以降、“人間以外”のイメージに、人間の赤ちゃんとしての意味づけが加わり重層的に再構成されていくというモデルのうえで考えれば、29～30 週以降、“内的状態”が多様化したととらえられるだろう^{5) 6)}。

第二のターニング・ポイント：33～34 週齢 33～34 週齢前後の変化について、特徴的だった“応答”に着目し検討する。妊婦 52 は、32 週以前(日記数 112)は、“母への応答”：“他への応答”が 22：8、33 週以降(日記数 33)は、1：7 であった。たとえば、妊婦 17 も、25 週から 33 週まで“母への応答”しか語らず(日記数 28 中 4)、34 週から 36 週まで、“母への応答”と“他への応答”をほぼ交互に語り(日記数 16 中 3：2)、36 週以降は“他への応答”しか語らなかった(日記数 19 中 2)。では、“母への応答”から“他への応答”への移行をどうとらえればいだろうか。

(52105;32w)「もう、いいかげん名前を決めておかにならん」と、よしべえに話しかけていた。……「その通り。早く名前を一!!」と思ったよしべえが返事をしたのでしょう。：母への応答

(52136;36w) パパがお腹に手をのせると動く。私がソファに座っていると……パパは、すぐお腹に手をのせてくる。パパも……楽しくてしょうがないらしい。私も嬉しい!!：他への応答

(52105)では、お腹に話しかける妊婦と、それに同期して生じた胎動との“やりとり”が語られている。一方、(52136)では、(なにもしなければ)妊婦にしか感じられない胎動を、妊婦のお腹に触れることで夫と共有している様子が語られている。妊婦の意味づけが、いわば(52105)から(52136)へと変化することは、母親が独占している胎動を、第三者へ開く過程ともとらえられる。自分自身に対する応答のように感じられる胎動への関心が、週齢が増すにつれて、自分自身以外の夫や母親(胎児の祖母)の声、雷や花火の大きな音に対する反応であろうと思われる胎動への関心へ移行する。胎動を自分と胎児のやりとりとしてとらえた対面的関係から、胎児と第三者とのやりとりをみる、あるいは、胎児と同じ音を聞くといった三項関係や並列的關係に変化する。もちろん、実際の胎児—妊婦の相互作用がそのように変化するかどうかは本データからは不明であるが、少なくとも妊婦自身の主観的な関係のとらえ方が、二者関係に第三項を介入させるように変化する。このような変化は、子育てを子別れの過程ととらえなおした立場(根ヶ山, 1995)に立てば、胎児をおなかの外の世界と結びつけることで、三項関係をとらえている点で興味深い。つまり、出産という物理的な子別れを目前に、胎児を外の世界の広がりの中に措定することは、心理的な疎隔化を進めているともとらえられる。

これまで述べてきた妊娠期の胎動への意味づけの過程

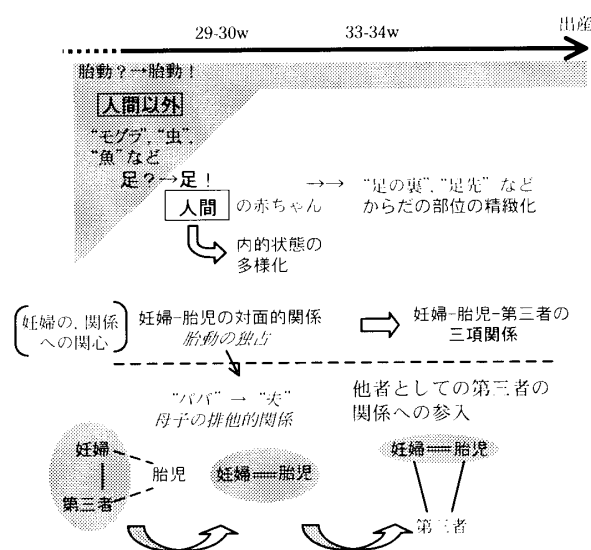


Figure 7 妊娠期の胎動への意味づけ過程のモデル

をまとめると、Figure 7 のようになる。

呼称の変化 なぜ妊婦の呼称は妊婦自身の視点から児の視点へ変化するのに、第三者の呼称は児の視点が先行し妊婦自身の視点へと変化するのだろうか。上で述べた Figure 7 のモデルのうえで、呼称の変化の解釈を試みる。

29～30週以前は、胎動を感じても人間の赤ちゃんとしての実感を得ていない時期ととらえてきた。人間の赤ちゃんの実感がなければ、自分自身のことをまだ母親として認識できず、自身を“ママ”と語れないのも当然だろう。週齢が増すにつれて、胎動を人間の赤ちゃんとして感じられるようになり、それにともなって、自分自身も母親になるのだという実感がわいてくる。一方、第三者についてはこれと異なった過程が考えられる。妊娠という事実を知っていることから、第三者については児視点で“パパ”や“おばあちゃん”と語ることができる。しかし、自分のこととしては、まだ語ることができない。人間の赤ちゃんがお腹にいるのだという実感と共に、自身のことを母親として自覚できるようになる。自覚が強まるにつれ、排他的な母子関係がイメージされるのだろう。おそらく、妊婦自身が直接人間の赤ちゃんとしての動きを感じられるようになればなるほど、第三者がその動きを感じることができないという事実と直面するのではないだろうか。

ところで、胎動への意味づけ過程のモデル (Figure 7) のうえでは、33～34週を境に、二者の対面的関係から三項関係への変化を指摘した。これは、“呼称”についての考察における、29～30週以降の、排他的な母子関係への移行と、一見矛盾する。これらを整合して考えると、以下のようなモデルが仮定できる (Figure 7 の点線以下)。

妊娠週齢が浅く、胎児を“人間”ととらえられない時期は、妊婦自身は夫など第三者をより具体的にとらえる

ことができ、三項関係は、妊婦と夫に対峙した胎児という関係になる。次に、胎児を“人間”ととらえられるようになることによって、妊婦は、いったん、排他的な母子関係を構成し、そのうえで、他者としての第三者を母子の関係に受け入れるようになるのではないだろうか。しかし、“呼称の用い方”については、語られた日記数も限られており、今後検討の余地が大いにある。

総合的考察

本研究では、妊婦に胎動についての日記の記載を依頼し、それを胎動に対する語りとして検討し、妊婦の胎児への意味づけの過程をモデル化することを試みた。そして、29～30週および33～34週をターニング・ポイントとしたモデルを Figure 7 に示した。

ここで、胎動への意味づけについて、母子のやりとりという観点から考察を試みる。まず、胎動が、母親の意図とは関わりなく生じるということに立ち返りたい。

(20006;29w) 私が眠れないでいても、赤ちゃんは寝たり起きたり。赤ちゃんは赤ちゃんのペースで生きてるみたいで、うれしい感じ。

(30005;35w) ハムスターと遊んでいるとき。……ハムスターがかわいくてそのことしか頭になかった。赤ちゃんのことを忘れていたので、何かハッとさせられた。

(33010;37w) 検査中だということにおかまいなしに動く。……静かにして欲しかった。そう思うほど、激しく動くのでそれがおかしくて笑いを必死にこらえてました。

当然のことではあるが、妊婦と胎児は別個体であり、胎児の動きは母親にコントロールできるものではない。妊婦は自らの身体に、自分の意図とは別に生じる胎動を感じることで、胎児の存在そのものを知らしめられるのではないだろうか。そして、自分とは別の存在だからこそ、そこにやりとりの可能性が生じるといえるだろう。

また、本研究で述べてきたとおり、妊婦は、胎動から胎児の“足”をイメージできるようになると、それをきっかけに“人間の赤ちゃん”と思えるように変化する。さらに妊婦は、胎動に、人間の赤ちゃんにふさわしい複雑な感情や胎児の発話を意味づける。また、母親や他の人に反応したり応答したりするとも意味づける。これは、まさに、胎動を胎児の主体的行動としてとらえ、やりとりの相手として位置づけていることを示しているだろう。たとえば、胎児の発話として語られたものは、まさに胎児の代弁である。母子にみられる代弁は、本来の代弁でみられる発信者、代弁者、および、聞き手の三者関係を前提としない点で特徴的である (岡本, 2000, 2001)。胎動日記における胎児の代弁も、これと同様の特徴がみられた。つまり、代弁のメッセージが妊婦に向けられたものとして語られることが多く (先にあげた (33006) や (36003) など)、これは、妊婦と胎児の二者関係を前提と

しているものである。このように、妊婦は胎児をやりとりの相手として意味づけることにより、妊娠中から、主観的ではあるが母子関係を築き始めるのだらう。ここに妊娠中の親への移行のプロセスがあるように考える。なお、胎動とのやりとりを、主観的な母子関係にとらえたが、一方で、この関係は全く仮想のものではない。あくまで、母親にコントロールできない胎動を契機にしている。胎動は、コミュニケーションにおける胎児からの発信として重要な意味をもっているといえるだろう。

最後に、本研究の問題点として、データの統制が不十分であったことをあげる。参加者によって、日記を書いた期間も日記数も異なる。また、週齢の浅い時期やカテゴリの“呼称”についても、全体に対してデータが少数である。また、日記における語りの背景にあるはずの、胎動そのものの変化については、本研究では扱えなかった。しかし、少なくとも、胎動に、胎児のからだのイメージを意味づけられるようになることで、母親の胎児への意味づけは大きく変化した。

今後は、胎児への意味づけがより具体的な人間の赤ちゃんのイメージとして変化することと、母親としての適応、とくに母親の感情面に焦点化した分析を試みたい。

文 献

- 荒井 良. (1976). 胎児の環境としての母体 — 幼い生命のために. 東京: 岩波書店.
- 蘭香代子. (1989). 母親モラトリアム時代. 京都: 北大路書房.
- Condon, J. T. (1985). The parental-foetal relationship—a comparison of male and female expectant parents. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology*, **24**, 313-320.
- Condon, J. T., & Corkindale, C. (1997). The correlates of antenatal attachment in pregnant women. *British Journal of Medical Psychology*, **70**, 359-372.
- Conrad, R. (1998). Darwin's baby and baby's Darwin: Mutual recognition in observational research. *Human Development*, **41**, 47-64.
- Deutch, F., Ruble, D. N., Fleming, A. S., Brooks-Gunn, J., & Stangor, C. (1988). Information-seeking and maternal self-definition during the transition to motherhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55** (3), 420-431.
- Fledman, S. S., & Aschenbrenner, B. (1983). Impact of parenthood on various aspects of masculinity and femininity short-term longitudinal study. *Developmental Psychology*, **19** (2), 278-289.
- 花沢成一. (1979). 妊産婦におけるつわり症状と母性発達との関係. 日本心理学会第42回大会発表論文集, 554.
- Hess, E. H. (1972). "Imprinting" in a natural laboratory. *Scientific American*, **227**, 24-31.
- Joseph, R. (2000). Fetal brain behavior and cognitive development. *Developmental Review*, **20**, 81-98.
- 上妻志郎・岡井 崇・水野正彦. (1983). 超音波断層法による胎児行動の解析. 周産期医学, **13**, 1897-1900.
- 川井 尚・大橋真理子・野尻 恵・恒次鉄也・庄司順一. (1990). 母親の子どもへの結びつきに関する縦断的研究 — 妊娠期から幼児初期まで. 発達心理学と医学, **1** (1), 99-109.
- 川井 尚・庄司順一・恒次鉄也・二木 武. (1983). 妊婦と胎児の結びつき — SCT-PKSによる妊娠期の母子関係の研究. 周産期医学, **13**, 2141-2146.
- Kisilevsky, B. S., Fearon, I., & Muir, D. W. (1998). Fetuses differentiate vibroacoustic stimuli. *Infant Behavior and Development*, **21**, 25-46.
- Levy-Shiff, R. (1994). Individual and contextual correlates of marital change across the transition to parenthood. *Developmental Psychology*, **30** (4), 591-601.
- 間崎和男・平川 舜. (1998). 胎動が激しいがへその緒が巻いてしまわないでしょうか. 周産期医学, **28**, 186-188.
- 室岡 一・越野立夫・高橋 亘・力武義之. (1983). 胎児期の母子相互作用. 周産期医学, **13**, 2133-2137.
- 根ヶ山光一. (1995). 子育てと子別れ. 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著), 子別れの心理学 (pp.12-30). 東京: 福村出版.
- 大日向雅美. (1981). 母性発達と妊娠に対する心理的な構えとの関連性について. 周産期医学, **11**, 1531-1537.
- 大日向雅美. (1988). 母子関係と母性の発達. 心理学評論, **31**, 32-45.
- 岡本依子. (2000). 母子コミュニケーションにおける母親における子どもの代弁: 1歳児への代弁の分類. 人文学報第307号, 東京都立大学, 東京, 73-94.
- 岡本依子. (2001). 母親と子どものやりとり. やまだようこ・サトウタツヤ・南 博文 (編), カタログ現場心理学 — 表現の冒険 (pp.12-19). 東京: 金子書房.
- 澤田英三・鹿島達哉・南 博文. (1992). 母親の素朴な発達観の特徴と構造について: 事例的研究. 広島大学教育学部紀要第41号, 広島大学, 広島, 89-98.
- 菅野幸恵. (2001). 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ. 発達心理学研究, **12** (1), 12-23.
- 鈴木武徳・久慈直志. (1995). 妊娠から出産まで. 東京: 有紀書房.
- 多田 裕. (1992). 胎児期の発達. 高橋道子 (編), 新・

児童心理学講座第2巻：胎児・乳児期の発達 (pp.32-55). 東京：金子書房.

利島 保. (1983). 妊産婦の母性形成過程. *周産期医学*, 13, 2129-2132.

付記

本論文作成にあたり、貴重なご助言ならびにご指導をいただきました、東京都立大学の須田治教授に深く感謝

いたします。また、データ収集にお手伝いいただいた、大妻女子大学助手の青木弥生さん、お茶の水女子大学研究生の川田暁子さん、東京都立大学人文科学研究科の亀井美弥子さん、川田学さん、東北大学教育学研究科の高橋千枝さんに、感謝申し上げます。最後に、お腹の赤ちゃんを心待ちに胎動日記を書き続けてくださったお母様方に心よりお礼申し上げますとともに、お子さま方の健やかなご成長をお祈り申し上げます。

Okamoto, Yoriko (Shohoku Collage), Sugano, Yukie (Shirayuri Collage) & Negayama, Ko'ichi (Waseda University). *Mother Fetus Interaction from the Viewpoint of the Pregnant Woman's Diaries about Fetal Movements*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2003, Vol.14, No.1, 64-76.

Fetal movement is the only experience through which pregnant women can directly feel their own unborn children. The present study examined how pregnant women ($N=33$) described fetal movement, in order to consider women's perceptions of and relationships with their fetuses. Participants kept a pregnancy diary, giving particular attention to their thoughts and feelings about fetal movement. Analysis of the 882 diary entries identified two major times when women's perceptions of fetal movement were particularly notable. In 29th-30th weeks of pregnancy, women began to mention the fetal leg, which suggests that they perceived the fetus as human at that point. The other significant change in descriptions came in the 33rd-34th week, when women reported that other people felt fetal movement as the third party entered into the mother-fetus relationship. Finally, this paper discussed changes in the meaning of the spontaneous fetal movements in terms of interactions between pregnant women and fetus.

【Key Words】 Fetal movement, Parental development, Mother-fetus relationship, Maternal diary, Maternal perception

2001. 7. 11 受稿, 2002. 9. 3 受理

Appendix 語った妊婦の割合

週齢	からだの部位			内的状態				発話	性格	胎児の応答		日記に現れた人物	
	手	足	人間以外	(	正	負	その他)			母へ	他へ	妊婦	第三者
< 24	0	0	0.33	0	(0	0	0)	0.33	0	0.33	0	0.33	0.33
25 - 26	0	0.4	0.2	0.6	(0.4	0.2	0.4)	0.4	0.2	0.8	0.2	0.8	0.8
27 - 28	0.17	0.17	0.33	0.67	(0.5	0.33	0.5)	0.17	0.33	0.17	0.5	0.5	0.5
29 - 30	0.17	0.58	0.17	0.58	(0.33	0.33	0.42)	0.58	0.25	0.42	0.33	0.92	0.92
31 - 32	0.31	0.63	0.19	0.81	(0.31	0.63	0.63)	0.5	0.38	0.5	0.38	0.69	0.75
33 - 34	0.27	0.23	0.18	0.77	(0.45	0.45	0.59)	0.41	0.14	0.41	0.45	0.55	0.73
35 - 36	0.24	0.48	0.03	0.79	(0.52	0.62	0.45)	0.38	0.28	0.38	0.48	0.66	0.83
37 - 38	0.31	0.48	0.14	0.69	(0.38	0.38	0.45)	0.38	0.21	0.31	0.45	0.41	0.66
39 - 40	0.18	0.36	0.09	0.55	(0.27	0.36	0.09)	0.36	0.09	0.18	0.36	0.18	0.45